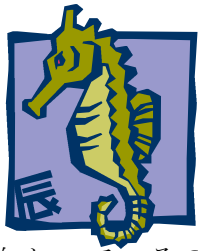


こんな時こそ、学校に元気、子どもに元気、先生に元気を！



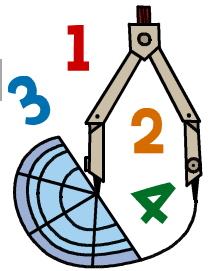
平成24(2012)年、新しい年の幕開けです。十二支で今年は辰(たつ)年、「たつ」にまつわる話はいくつもありますが、「登竜門」という言葉はご存知かと思えます。この言葉は、「鯉が黄河上流の竜門山の急流を登り切ると竜になれる」という言い伝えから生まれた故事成語で、立身出世や成功の糸口となる事柄を指します。

東日本大震災を始め、何かと大変なことが多かった昨年を『竜門』として、今年を飛躍の年としたいものです。是非、子どもたちには、夢や希望に向かって、その実現のため新たな一步を踏み出させたいものです。本たよりでも学校現場に役立つ情報を積極的に提供していきたいと思えます。また、内容等に対して御意見、御要望がありましたら、遠慮なく御連絡ください。

全国学力・学習状況調査結果を活用した学力向上研修会

去る12月21日(水)、東海文化センターにおいて、国立教育政策研究所の国語の樺山 敏郎 先生と算数・数学の磯部 年晃 先生、お二人の学力調査官をお招きして上記研修会が開催されました。

この研修会は、「過去4年間の全国学力・学習状況調査をとおして見えてくる学力向上のための課題を明確にし、各学校での学習指導の改善が図れるようにするとともに、本県児童生徒の確かな学力向上を図る」ことを目的に実施されたもので、特に、樺山調査官からは、全国調査の目的や意味について説明があり、調査がもつ意味について、以下の10点にまとめて解説をしていただきました。



【全国学力・学習状況調査がもつ意味】

- 1 テスト(点数、序列)ではなく、調査(課題把握)である。
- 2 課題を把握するだけでなく、指導改善につなげるための調査である。
- 3 目指しているのは競争や序列化ではなく、共有や協働である。
- 4 特定の児童生徒のためだけでなく、全児童生徒のために実施する。
- 5 特定の教職員のためだけでなく、全教職員のために実施する。
- 6 特定の教科における学力の一側面であるが、重要な意味をもつ一面である。(学習指導要領の具現化)
- 7 A問題とB問題に分けているが、一体的な指導を期待している。
- 8 A問題は、基盤的事項としての理解に止まらず、実生活で常に活用できることが望ましい事項である。
- 9 B問題では、応用力(発展)を問うのではなく、活用する力を問うのであり、A問題と同様に基盤である。
- 10 B問題は、「PISA調査」の予行や真似ではなく、日本の教育が目指す「生きる力」と関連した問題である。



また、課題となる学力や授業改善に向けたポイントについては、平成21年の調査問題の活用が全国で〔小学校；61.1%、中学校52.0%〕に止まっている状況から、校内研修等で各問題が「どんな力を求めているか」をよく知り、その上で課題を把握・分析し、日々の学習指導の改善に役立ててほしいとのことでした。さらに、国立教育政策研究所教育課程研究センターから出されている全国調査の解説資料や報告書、「授業アイデア例」を校内研修や授業計画・授業改善のために、活用してほしいとのことでした。

全国調査は、上記のように非常に意義のあるものですので、子どもたちの学力向上に向けて、是非、積極的かつ有効に活用するようお願いいたします。

いばらきサイエンスキッズ「おもしろ理科教室」



サイダーを使った実験(上吉影小)

今年度の新規事業として、『科学創造立県いばらき』の将来を担う人材の育成のために、理科免許をもつ教員がいない小学校を中心に、理科専門員を派遣する『おもしろ理科教室』を開催しました。本事務所でも2人の理科専門員が、昨年7月から本年1月まで、60校延べ74回行いました。

上吉影小では、田崎 裕太 専門員が自作した器具を使って、サイダーに溶けている炭酸を確かめる実験を行いました。普段の授業では実施が難しい実験ですが、器具の工夫もあって子どもたちの興味・関心を引きつける授業になり、教室は驚きや感動にあふれ、大変好評を博しました。

来年度も実施する予定ですので、是非積極的に声をかけてください。